

水戸芸術館音楽紙 [ヴィーヴォ]

VIVO

5&6

MAY/JUNE
2005

CONTENTS

| | |
|---------------------------------------|-----|
| 水戸室内管弦楽団第61回定期演奏会 | 1,2 |
| ぞうのババール2005 | 3 |
| 「茨城の名手・名歌手たち」 第16回出演者オーディション | 3 |
| ミハイル・プレトニョフ ピアノ・リサイタル | 4 |
| SELF PORTRAIT 川又明日香 | 5 |
| 最近の公演から | 5~7 |
| ネタマ | 7 |
| インフォメーション | 8 |



水戸室内管弦楽団

15周年記念演奏会の幕開け

6 / 18(土) 19(日)水戸室内管弦楽団第61回定期演奏会

1990年の水戸芸術館開館と同時に結成された水戸室内管弦楽団(MCO)が15周年を迎えます。その記念碑的な演奏会の口火を切ることになるのが、第61回定期演奏会。それは、MCOの活動の大きな柱のひとつである指揮者を置かない演奏会です。国際的に活躍するソリスト達それぞれの個性や音楽性が、集積され、彫琢を経て、一気に発露されることとなります。この記念碑的な演奏会では、演奏家たちにとっても今なお鮮烈な記憶として残る、MCOの宝物のようなレパートリーである2つの作品が取り上げられます。それは、一柳慧の「汽水域」とメンデルスゾーンの交響曲第4番「イタリア」です。さらに、シューベルトの「イタリア風序曲」が冒頭に置かれ、祝祭的な雰囲気飾ります。

一柳慧：フルートと弦楽アンサンブルのための「汽水域」

1992年11月の第11回定期演奏会で、MCOの委嘱により世界初演された作品です。国際舞台で活躍する優れた日本人音楽家を中心に構成されたオーケストラは、どのような演奏を行なうことができるのか？ また、そこにどのような意味を見出せるのか？ - - こうしたわが国における西洋音楽の受容とその現代における意義を探ろうとする壮大な実験をMCOは試みてきています。それだけに、現代の日本人作曲家の手による作品というのは、MCOにとって、重要なレパートリーである

と言えるのです。なぜならば、西洋音楽の文脈のなかで、日本人である自分がどのような創作を行えるのかという問題に、真正面から向き合っているのかという問題に、優れた日本の作曲家たちに他ならないからです。一柳慧氏は、20世紀の音楽創作の大きな潮流のほとんどすべてを通過して、今日の音楽表現の可能性を追い求めています。そして、自身の作曲家としての根底に日本人であるという意識を持ち続けている作曲家です。(一柳氏へのインタビュー記事を参照してください。)フルート独奏は初演と同じ、工藤重典です。

メンデルスゾーン：交響曲第4番「イタリア」

1996年6月の第25回定期演奏会およびMCO初の館外公演である大阪公演で演奏された作品です。96年当時は、指揮者なしで自分たちが演奏できるレパートリーとしてはギリギリの線であろうというのがMCOメンバーたちの評でした。確かに、2フルート、2オーボエ、2クラリネット、2ファゴット、2ホルン、2トランペット、ティンパニ、弦5部という編成の大きさです。加えて、この作品の優美な歌謡旋律や軽快で切れのよいリズム、そしてロマン派音楽特有のドラマティックな表現を、指揮者なしですべての演奏者たちが意思疎通しあい演奏するというのは、並大抵の作業ではありません。96年の演奏会でMCOは、その困難を克服し、まさに聴衆を熱狂させる演奏を披露してくれました。それから9年が経ちました。その間、2度のヨーロッパ・ツアーをはじめ幾多の演奏会を重

ねてきたMCOが、今回はどのような演奏を聴かせてくれるのか？ どうぞご期待ください。

シューベルト：イタリア風序曲 D.590

イタリア風序曲ではじまり、交響曲「イタリア」で終わる今回のプログラム。この光に溢れた、輝かしい2曲により、15周年という祝祭的な空間が演出されます。この作品は、シューベルトが、イタリア国内で熱狂的な人気を博したロッシェニのオペラ、とりわけ「オテロ」の虜となり、作曲されました。付点リズムやシンプルな和声進行、明るく澄んだ主題が魅力です。

MCOが目指している道のりには、まだ長い歳月がかかります。そのためには、MCOの演奏を聴いてくださる皆様の存在が必要なのです。どうぞMCOの演奏をこれからも楽しまれ、見守っていただきます。

《中村》

音楽の空間性、そして「汽水域」という中間領域の探究

一柳慧氏インタビュー

一柳さんは、ニューヨークのニュー・スクールでジョン・ケージの講座に参加され、1960年代の初頭には、ご自身の作品やケージ作品を含むアメリカの前衛作品の演奏会を通じて、わが国に不

写真左; 1992年1月
MCO第11回定期演奏会
汽水域
右; 一柳 圭



確定性の音楽(*1)を紹介され、大きな衝撃をもたらされました。当時、どのような想いのもとに不確定性の音楽を作曲されていたのですか？

一柳:私がニューヨークにいた50年代から60年代初頭の頃までの問題というのは、今、私がやっていることともかなり直接的に繋がっていることです。近代ヨーロッパでは、クラシック音楽は、時間芸術と呼ばれていた訳ですよね。やがて時間芸術としての音楽の調性の組織が崩壊してくるのですが、それはヨーロッパの社会的な在り方とも密接にかかわっていると思います。市民社会が興隆してきて、王侯貴族とかあるいは教会などが主体でやっていた音楽が社会の中に入ってくるようになりました。王侯貴族や教会の牧師のような社会を支配していた人の下に民衆がいるのではなくて、民衆ひとりひとりが自立したものになってくる。そうすると音楽もそれに連れて変わったものになってきたのです。音階の中にあつた、たとえば八長調とかへ長調といったひとつの音を基準にした音楽から、12音音楽(*2)のようにひとつひとつの音が独立したものに変わってくるというのは、やはり特にヨーロッパ社会での近代化、現代化とつながっているのだと思います。ところがシェーンベルクなどの作品には、調性音楽などにあつた、たとえばドラマ性とか起承転結とか、あるいは音楽の筋書きという、音楽の方で聴く人を引っ張っていかける要素が無くなっていく訳ですよ。それでシェーンベルクなども12音音楽を作ることでひとつひとつの音を独立させたことはいいのですが、その音楽が持つ、音楽が引っ張る、人を惹きつける力というのが、昔のクラシックと比べたら弱くなってきている。そうするとそこに今まで音楽を規定していた時間というもの、特にワーグナー以後ですけれど薄くなっていくので、何かそれに代わる要素あるいは、それを補足する要素が必要になるのではないかと思うのです。当時は、それをちょうど探していた頃だと言ったら良いでしょうね。アメリカに行った当初は、私も12音音楽を書いたり、いろいろ試行錯誤をしていました。その時代というのは、皆行き詰っていて、作曲家にとって曲が書きにくい、非常に難しい時代だったと思います。その突破口を見つけたいという気持ちが強くあつて、それでケージや彼と一緒にやっている取り巻きの人たちと出会う、不確定性の音楽とか、今までの考え方とは全く違うものに出会ったことが、非常に大きなことでした。

お話しの中で、今も繋がっていることだとお話し

ましたが、もう少し詳しくお話しいただけますか。
一柳:時間というものが、音楽の構成要素としてはそれだけでは成り立ちにくくなってきたということを非常に感じています。そして、今度演奏していた汽水域にも関係しているのですが、これまで音楽ではあまり省みられなかった空間というものを音楽の中にとりこめないだろうかということを考えているという点で、そういうことを積極的に展開したのはもう少し後のことですが、繋がっているんですね。最初の頃はそういうことをあまり意識していませんでしたが、不確定性の音楽では楽譜も、五線譜をはみだしたものとか、まったく五線譜を使ってないものが多く、それらは昔のように音楽を読んでいく場合に、左から右へ流れるとか、横軸に流れるというものではなくて、方向性とかあるいは始まりと終わりが定められているというものではありません。ですから時間とは違う在り方というのが、そこには見られるなと思いました。ケージは実際には空間性ということはいち自分では言っていませんでしたけれどね。彼は日本や東洋の哲学や思想に造詣が深かったのですが、日本の芸術というのは時間と空間を分けていないんですね。

1972年のピアノ・メディアで、五線記譜法による音楽を書かれるようになりましたね。

一柳:新しい記譜法に依らず五線譜で、さき申し上げた空間などの問題と結びつけた表現ができないかということを考えて始めたのです。ピアノ・メディアは、表面的に見れば確かに五線譜に戻ったというふうには捉えられがちなのですが、空間の音楽の最初の考え方を五線譜で導入した作品なのです。この作品は2つの要素から構成されていて、最初はそれぞれが遠く離れています。2つの要素の一方は変化しないで持続され、もう一方がだんだん近づいてきてやがて合体し、また離れていくという関係になっています。2つの要素の間で空間的な音楽の関係を提示しているという考え方で作っています。

汽水域での空間性の問題についてお話しいただけますか？

一柳:リハーサルのときにオーケストラの皆さんにも、少し説明させていただこうとも思っていますが、要するに、今までのような二元論ではなくて、時間と空間という別々のものを相互交流させるとか相互に浸透させるということ、試みていた時期の作品の一つです。ここでは50年代や60年代

にやっていたのとはまた違った形の、結果として不確定な要素が取り入れられています。それはなぜかという、「汽水域」に象徴されるような、海であり川であり、しかし海でも川でもないという中間領域を考え、時間と空間があればそれを二元的に考え、ただ重ね合わせるというのではなくて、その間の領域というのが当然あるわけで、その考え方を作曲に使えたらなと思ったのです。その箇所は曲の後半に出てきます。

最後に水戸の聴衆にメッセージをお願いします。

一柳:音楽だけではなくて、いくつかの芸術分野が交流している施設というのが、水戸ぐらいの規模の都市で存在しているというのは非常に珍しいことだと思います。普通の大きなコンサートホールに行くのとは違って、音楽を聴きに行かれる一方で、美術を鑑賞したり、あるいは演劇を観たりということ、是非していただければと思います。それぞれの芸術のもつ、たとえば、なぜこのようなことをやっているのかということなどが、ひとつだけの分野を見ているよりも、相互関係で見た方がより理解は深まるし、きっと芸術に関心を持ってくださる人も増えるのではと思います。そして、そういう見方、聴き方をしていただけると、それこそ精神文化的なものが、街の環境にも広がっていくのではないのでしょうか。

どうもありがとうございました。

(2005年4月9日 東京のご自宅にて)

*1 偶然性の音楽とも言う。1950年代の初頭より、ジョン・ケージなどによって主張、実践された音楽。作曲家による音の支配やコントロールを放棄し、たとえば自然の中にある石や樹木などと同じように、音を音たらしめようとした。

*2 さまざまな作曲家が12音の組織化を試みているが、とりわけ重要な存在がシェーンベルクである。シェーンベルクの12音音楽の特徴は、12の音をすべて用いたセリー(音列)を構成要素の基礎として、それをもとに、楽曲の旋律的・和声的な音の配列の組織化を行った。

*水戸芸術館のホームページ [http://www.arttowermito.or.jp/] で、本インタビューの完全版を掲載しています。どうぞご覧ください。



写真左より;
高橋アキ、長野羊奈子
『ぞうのババール』2004年の公演より

こどもに楽しい。おとなに優しい。 5 / 3(火・祝)音楽物語『ぞうのババール』復活第2弾！

昨年復活した水戸芸術館の名物企画、『ぞうのババール』。おかげさまでチケットは売り切れの盛況で、お問い合わせいただいたにもかかわらず残念ながらいらっしゃれなかった方々も少なくありませんでした。そんな方々からの「来年もぜひババールを！」という声にお答えしまして、今年も『ぞうのババール』、ゴールデン・ウィークに開催です(今年は5月3日ですのでご注意ください)。最初に申し上げますが、チケットはまだございます。ババール未体験の方はもちろん、もう一度ババールの世界をお子様といっしょに味わいたい方々、ぜひGWのお楽しみにおいってください。

ババール復活、その舞台裏

あらためてご紹介しておきますが、この『ぞうのババール』は1995年から97年まで3年間にわたって芸術館で行われ、全国各地の14箇所でも公演を行った水戸芸術館のヒット企画です。発案者は当時芸術館音楽部門のスタッフだった室住素子さん(現在はオルガニストとして活躍中)。室住さんは、子供の大好きな『ぞうのババール』の絵本と、その絵本にプーランクがつけた素敵な音楽を、同じ舞台で「共演」させることはできないかと考え、卓抜なアイデアを思いつきました。それは、カメラマンの田澤 純さんと共に絵本から制作した160枚のスライドを、ピアニストと語り手がすすめてゆくババールの物語と対応シンクロさせて舞台上のスクリーンに投影していく、というものです。ピアノの高橋アキさん、語り手の長野羊奈子さんというコンビは当時から不動のまま。『ババール』の前には、高橋アキさんの弾き語りやサティの子供の音楽集 新・子供の音楽集 からの抜粋が演奏されます。

さて、昨年7年ぶりに蘇ったババールですが、以前とどんなところが変わったの? というご質問に、制作の舞台裏もまじえつつお答えしましょう。もち

ろん、基本構成は完全にオリジナルのままです。

「第1期」ババールでは絵本の各シーンを撮影し、スライドに起こすといういわば「アナログ」方式がとられていましたが、その後のテクノロジーの発達が目覚しく、『新・ババール』ではデジタル方式を採用しています。つまり、画像をコンピュータでデータ化し、プロジェクターを通して画面に投影するというやり方です。ひとことで「コンピュータでデータ化」と言ってしまうましたが、これがたいへんな仕事でした。スライドをそのままデータ化したら、いわば「コピーのコピー」になってしまい、画像の鮮明さが失われますから、オリジナルの絵本から直接画像をとらなくてはなりません。この作業は舞台技術係の二ノ宮と岩崎が田澤さんのディレクションを受けながら進めたのですが、室住さんと田澤さんが行ったスライド構成のアイデアに驚嘆し、その苦労を追体験する作業となりました。スライドは単に絵本をコピーするだけではなく、何段階かに分けて画面を拡大してゆくズーム・アップを駆使したり、時には一部分だけをトリミングして拡大しキャラクターの心情を豊かに描いたり、原作者のプリユノフが見たならばきっと喜んでくれるに違いない、みごとな「映画化」が行われていたのです。その精神を忠実に再現すべく苦労を重ねながら作業を終え、投影された映像はまるで古い名作映画のニュー・プリント版のような鮮明さ。一同歓声を上げたことは言うまでもありません。

この企画は、高橋アキさんと長野羊奈子さんのほかに、もう一人の「演奏家」が存在します。つまり映像操作する人間です。これは、ただ何秒おきかにスライドを切り替えてゆくという機械的な作業ではまったくなく、楽譜に室住さんが指定した切り替え場所に従い、演奏を聴きながらジャスト・タイミングで切り替えてゆくというきわめてスリリングな仕事です。これには、楽譜が読み、ババールの音楽をよく理解し、かつ2人のアーティストと呼吸を

合わせて「共演」することができる人材が必要で。幸い、ピアニストでもあるスタッフの馬場が、芸術館7年の在職期間の中で豊富な経験を通じ磨いたオルガンのアシスタントやピアノの譜めくりの腕を存分に発揮し、この大役を務めてくれました。もちろん、「共演」前に、映像を見ながら猛練習を積んだことは言うまでもありません。

高橋アキさんと長野羊奈子さんの名コンビは昔のまま。とはいえ、7年の月日を通じ、おふたりの演奏も少なからず変化しています。高橋アキさんについて、私は去る1月に築地浜離宮ホールで連続して行っている『ピアノ・ドラマティック』というリサイタル・シリーズの最新回を聴いたのですが、ベルク、シェルシ、鶴見幸代、シューベルト(最後のソナタ)というすごいプログラム。いつもながらの明晰なタッチの中に深い感情がやどり、それは感動的な演奏会でした。ババールの音楽の叙情性に、いっそうの深み加わることでしょう。長野さんも、以前の起伏豊かで芝居っ気たっぷりの語り口から、おだやかに滋味深く語りかけるようなトーンに変化しました。芸術館では通算5回目となる『ぞうのババール』、聴けば聴くほど味わい深い演奏となりそうです!

そう、付け加えておかなばなりません、もうひとつ変わったことを。2人の演奏家が昨年、演奏を終えて口々に言っていたのですが、「客席の雰囲気はずっと落ち着いた、集中したものになった」のだそうです。最初の頃のわんぱくキッズが走り回っていた頃もそれはそれで懐かしいのですが、芸術館のこの10年の中で、「聴く」という心がお客様、お父様を通じてお子様にも育ちつつあるのだとしたら、こんなに嬉しいことはありません。ババール君も皆様のまなざしにはくまれ、「成長」していきます。5月3日、ご家族の皆様で、ぜひおいってください!!

《矢澤》

次なる名手たちは..!?

5 / 28(土)「茨城の名手・名歌手たち 第16回」出演者オーディション

茨城県に関わりのある優れた音楽家を広く紹介する演奏会「茨城の名手・名歌手たち」も、今年で16回目。10月8日[土]開催予定の演奏会に先立ち、5月28日[土]に出演者オーディションを行います。今回は、管楽器、打楽器、声楽、器楽アンサンブルの各部門が審査対象です。

ここ数年、鍵盤楽器、声楽に次いで応募数が多いのは管楽器部門。先日、東京でのオーケストラ公演の管楽器出演者の中に「名手・名歌手たち」出身の名前を見つけました。各方面で活躍されている「名手・名歌手たち」出身の方がたくさんいらっしゃるのには本当に喜ばしいことです。

オーディションは、茨城県に関わりのある方ならどなたでも参加できます(応募受付期間は4月30日[土]迄)。また、一般公開されますので(入場無料。詳細はお問い合わせください)。次なる名手を目指す熱い演奏を聴き、是非、コンサートホールへ足をお運びください。

《馬場》



写真:ミハイル・プレトニョフ

思索するピアニスト、プレトニョフが満を持して臨むリサイタル 6 / 5 (日) ミハイル・プレトニョフ ピアノ・リサイタル

旧ソ連が生んだヴィルトゥオーゾ

ベートーヴェン チェルニー リスト シロツティ イグムノフ フリエール ウラセンコといった人名の並びを見て、何だかお分かりでしょうか? そう、これはプレトニョフに至るピアノの師弟関係をさかのぼった系譜です。この系譜の枝分かれとして、シロツティの弟子にはラフマニノフ、イグムノフの弟子にはオポーリン(その弟子にはアシュケナージ)、フリエールの弟子にはショスタコーヴィチといった名前も見えます。こうした長く輝かしい歴史と類まれなるヴィルトゥオジティの伝統を受け継ぐ存在として、現在の音楽界に着々と名声を築いているのがミハイル・プレトニョフなのです。

プレトニョフのプロフィールについては、チラシに詳しく記されています。1957年に旧ソ連のアルハンゲリスクで音楽家の両親のもとに生まれ、7歳でピアノを開始、17歳でモスクワ音楽院に入学、21歳でチャイコフスキー国際コンクール優勝。その後は世界各地でリサイタルを行うとともに、アップバード指揮ベルリン・フィル、ジュリーニ指揮ヨーロッパ室内管、マゼール指揮バイエルン放送響といった超一流の指揮者、オーケストラと共演するなど、ピアニストとして非のつけどころのないエリートコースを歩んでいます。指揮者、作曲家としての才能も非凡であり、自らも設立に携わったロシア・ナショナル管弦楽団の指揮者として活躍するほか、フィルハーモニー管弦楽団、スウェーデン放送交響楽団等にも客演しています。また、1月の東京フィルハーモニー交響楽団の演奏会にも客演指揮者として登場し、自作のヴィオラ協奏曲(独奏:清水直子)を取り上げて喝采を浴びました。

“氷の中の炎”

さて、ピアニスト、プレトニョフの演奏を一言で形容するならば“氷の中の炎”(チラシのキャッチコピー)となるでしょうか。テンポ、アーティキュレーション、ダイナミクス、響き、色彩感など、すべてが緻密に計算され統御されたその演奏はどこか近寄りたがたい冷徹さを感じさせる一方、虚心になって耳を傾けるとヒューマンな暖かさやたぎるような情熱が聴く者の心に訴えてきます。

プレトニョフの演奏のこういった特質はどこから生まれてくるのでしょうか? 彼自身の言葉から追いかけてみましょう。

『知識というお荷物が創造的な個性の負担となり、直感の根源を抑え込む恐れがある、という意見をときどき耳にしますが、私はそうは思いません。むしろ反対に、知識や論理的な思考は直感に力と鋭さを与えます。直感をもっと高い段階に引き上げるのです。ひとりの人間が敏感に芸術を感じると同時に、深い思考と分析の作業を行う能力を持っていれば、その人は感覚だけに頼っている人よりも先に進めるはずです。』

『公開演奏用のプログラムは徹底的に練習しなければなりません。演奏者は絶対に良心にやましいところがないようにしなければならないのです。そうすれば自信もわいてきます。少なくとも私の場合はそうです。中には、往々にしておおまかさや粗さのようなものが感じられる演奏をする人がいます。見てごらん下さい、そういう人たちはテクニク的にむずかしい部分にこつりとペダルを<塗り固め>たり、思い入れたっぷりに両手を振り上げ、天井に目を走らせたりして、聴き手の注意をいちばん肝心な鍵盤からそらしていますから…。私自身はそういうことはしません。もう一度言いますが、私は、聴衆の前で演奏する作品の場合、練習の段階ですべてを完全に仕上げ、磨き上げ、テクニク的に非の打ちどころのないものにしなければならない、という考え方をしています。実生活、日常生活で私たちが尊敬するのは誠実な人たちだけではありませんか? そして自分たちをまどわせるような人は尊敬しないものです。これは舞台でも同じことです。』

『内面的な蓄積のようなものが重要です。それがあるときだけ、聴き手に会いたい、自分の持っているものを分かち合いたいという気持ちが起こるのです。作曲家や作家、画家と同じように、演奏家にもこの分かち合いたいという気持ちがとても重要なのです。人々に自分の知っていること、感じていることを知らせたい、自分の創造のときめきを、音楽の魅力や、理解を伝えたいという気持ちが非常にたいせつなのです。そういう願望がないなら、あなたは芸術家ではないし、あなたの芸術は芸術ではないのです。すぐれた音楽家たちと会ったとき再三気づかされたのですが、彼らは、そのためにこそ舞台に出ているのであり、自分の創造的な概念を共有の財産にし、あれこれの作品や

作曲家に対する自分のかわり方を語らずにはいられないのです。もっばらこういう態度で自分の仕事に臨むべきなんだと思います。』

(以上、Mikhail Pletnev Unofficial Web Site <http://www.mikhailpletnev.net/> より 訳:鷺見弘氏)

プレトニョフのこうした発言の中に、“氷の中の炎”と形容したその類まれなる演奏が成立するまでの過程が語られているようです。また、知的好奇心の旺盛さ、論理的思考への傾倒、自身の演奏に対する厳しい姿勢、ごまかしをする演奏家への批判、芸術家としての強い使命感なども読み取ることが出来ます。そして、思索するこのピアニストが、自らの芸術を通して聴衆と熱く交感したいと願うときはじめて「リサイタル」が実現することも。

プログラムについて

今回のリサイタルのプログラムは、ベートーヴェン ピアノ・ソナタ第7番 同第8番・悲愴、ショパン 24の前奏曲の3作品。プレトニョフからコメントが届きましたので、早速ご紹介しましょう。

『ベートーヴェンの2つのピアノ・ソナタは非常にドラマチックな作品。ハイリゲンシュタットの遺書を書く前に書かれた作品ですが、8番の 悲愴 というタイトルからも分る様に彼が悩み自殺を考えていた時期に書かれた作品。ショパンの 24の前奏曲 はショパンが病気の時に書かれました。スペインのマジョルカ島で病にかかったショパンがピアノを弾いている姿は、ジョルジュ・サンドが「あなたがもう死んでしまったかと思った」と言うくらいでした。

私は、去年の初頭、冬にインフルエンザにかかり、咳が止まらず苦しい思いをしました。そんな中で病や死についても考えました。このベートーヴェンとショパンのプログラムは、前後半に「人間の死」という共通性があり、ドラマチックなプログラムです。』

ベートーヴェンとショパンの名曲が連なるプログラムはそれだけで魅力的ですが、このコメントを読んで、思索するピアニスト、プレトニョフを聴くためにも絶好のプログラムであると感じます。どうぞお楽しみに。なお、残券僅少につき、チケットはお早めにお求めください。 《関根》



写真:川又明日香

SELF

PORTRAIT

弱冠17歳! 原田幸一郎氏も高く評価。桐朋女子高等学校音楽科で学ぶ期待の星、川又明日香さんが芸術館で初のリサイタルを行います。

5/22(日) 川又明日香 ヴァイオリン・リサイタル

今回、地元茨城で、そして水戸芸術館という素晴らしいホールでリサイタルを行えることをとても嬉しく、幸せに思います。弱冠17歳という年齢でのリサイタルですが、ピアニストの丹 千尋さんと共に、フレッシュな演奏をお楽しみいただくことができたいと思います。今回のプログラムは全てソナタを選曲しています。ソナタを4曲も弾くというのは、かなり集中力と体力を必要とします。でも全て私の好き

な曲なので、練習、本番共に楽しんで弾きたいと思っています。

1曲目のモーツァルトは、モーツァルトのソナタの中でも後期の充実した書法で書かれていながら、フレッシュで、勢いのあるあか抜けた曲です。モーツァルトはどのジャンルにおいても音楽的には難しいですが、躍り立つようなこのK.526では、“私の得意とするモーツァルト”をお聴かせできればと思っています。

2曲目は、私が今、どの作曲家よりはまっているプロコフィエフです。近代的な和声や独特なリズム、華やかな音程は、弾いていても、聴いていても、常に私を楽しませてくれます。ヴァイオリン・ソナタ第2番は、原曲がフルートソナタと言うこともあり、重音は少なく単純ですが、目が眩むような早いパッセージや、華やかに、軽快に、時に重々しくなる複雑な曲の構成がそのことを忘れさせる、素晴らしい曲です。フルートの奏法、息継ぎ等を研究しつつ、ヴァイオリ

ン・ソナタとしての魅力を十分に引き出すことに挑戦します。

一昨年、ラファエル・オレグ先生が、芸術館でイザイの無伴奏ソナタ第2番を弾いてくださいました。この曲は私も好きな曲で、いつかは取り上げたいと思っていましたが、こんなに早く機会が来るとは思いませんでした。Obsession というタイトルが付いたこの曲は、パッハのバルティータで始まり、Dies Irae (怒りの日)というグレゴリオ聖歌を曲中に何度も用います。パッハや、最後の審判、死といったObsession(強迫観念)を経て、懐かしい世界への憧れや、未来への焦燥感といったものを感じます。

最後は、ブラームスのソナタ第1番 雨の歌です。ブラームスは私にとってたいへん共感しやすい作曲家です。この曲は、第3楽章の冒頭主題が「雨の歌」という歌曲からとられており、それでこの名前が付いたようです。私のお気に入りの曲を聴いてください。 川又明日香

最近の公演から

MARCH



1



2



3

水戸ソリステン室内アンサンブル

第4回定期演奏会(3月5日)

水戸市在住のクラリネット奏者・兼氏規雄さんが代表を務める「水戸ソリステン室内アンサンブル」が登場した。水戸芸術館での前回の公演(1999年)におけるメシアン 世の終わりのための四重奏曲の演奏は今も記憶に新しいが、今回はがらっと趣向を変え「モーツァルト木管合奏の夕べ」と題し、セレナード第12番八短調K.388 や フィガロの結婚 ドン・ジョヴァンニ の抜粋などを演奏した。アンコールは、モーツァルト セレナード第11番変ホ長調K.375 より第5楽章。アンケートからどの曲も木管の伸びやかで煌々ようなアンサンブルが素晴らしく、楽しめた。特に デイヴェルティメントK.Anh229(439b) はなかなか聴けない楽器編成の上、息の合ったすばらしい演奏で感激でした。(ひたちなか市:Y.K.さん) すごく美しい音色で素晴らしい演奏でした。またこのメンバーの方々の演奏をぜひ聴きたいです。(無記名の方) 木管八重奏の独特な響きにどんどん引き込まれていった。有名なオペラのアリアもおもしろく、新鮮だった。トリオも3人の名手たちによる演奏が際立っ

ていて素晴らしかった。(水戸市:T.H.さん) とても素晴らしい演奏でした。これからも応援しています。(日立市:C.A.さん)

合唱セミナー2005(3月6日)

茨城県合唱連盟、茨城県高等学校教育研究会音楽部との共催により毎年開催している合唱セミナー。今年は、合唱指揮界の第一人者・栗山文昭氏を講師としてお迎えし、三善晃編曲 唱歌の四季を勉強した(ピアノ伴奏は田中直子氏)。栗山氏は「編曲作品を扱うときは、まず元がどうだったのか調べる必要不可欠である」と説き、唱歌の歴史的な成り立ちを解説した。また、実際に歌う練習に入る前に、各曲の特徴を分かりやすく説明。 朧月夜 での3拍子と日本語のアクセントの関係、雪 での“雪やこんこ”の意味(擬態音ではなく“降って来い”という意味だそう)、夕焼小焼 は唱歌でなく童謡であることなど、知っているようで実は知らないことがたくさん語られた。こうした前提を詰めた上で行われたセミナーは実にスムーズ。客席を埋め尽くした参加者は、栗山氏のタクトに引きつけられるように歌っていた。唱歌

最近の公演から MARCH



1



2



3



4



5



6



7



8

の魅力を存分に味わった様子で、6時間という長い時間があっという間に過ぎた。《関根》

ふたつの電話(3月12日)

ブーランクの 声 そしてメロッティの 電話 という、電話を題材にした20世紀の名作室内オペラふたつを組み合わせた、若杉 弘企画運営委員ならではの企画。声 に釜祐祐子、電話 に高橋薫子(相方は夫君の立花敏弘)という当代一流のソリストを迎え、電話を主題とした悲劇と喜劇を鮮やかに描いた。ピアノの谷池重紬子の表現力豊かなサポートもいつもながらの安定感。栗山演出はソファとテーブルを配したシンプルなセットを2作に共通し、時代背景等で異なる最小限の小道具のみごとにふたつの舞台を描き分け、それぞれの本質を明らかにした。若杉企画運営委員のプレトークは 声 のドイツ語朗読版など秘蔵の音源を用い、若き日にニューヨーク・シティ・オペラでメロッティのアシスタントを務めたことなど貴重なエピソードを交えた興味深い内容だった。アンコールはロッシェニ 猫の二重唱 を、ふたりのヒロインが携帯を手にして大熱演。《矢澤》アンケートから 声 は切なさいっぱい、電話 は楽しさいっぱい。出演者のみなさまもいつもどおりすばらしくても楽しかった。東京から来たかいはありました(東京都:M.I.さん) ブーランクの 声 は原語では三度きいていますが日本語版は初めてでした。すばらしかったです。感激いたしました。お二人のプリマドンナ、若杉先生のプレトーク、とても良かった。又心に残る想い出となります。感謝をこめてありがとうございます(S.Y.さん)

長須与佳 琵琶・尺八コンサート(3月13日)

邦楽ユニット“Rin'”のメンバーとして今や日本全国の活躍を続ける長須与佳さん。ソロステージとなるこの水戸芸術館のコンサートも、邦楽を現代に生きるものにしてという熱意に満ちたものだった。曲目はほとんどが長須さんもしくは共演者の中井智弥さん(二十五絃箏)もしくは隆 勇人さん(ピアノ、キーボード)によるもの。しかし、平家物語の女性をテーマにした 祇王 や 千手 といった「古典の新生」といった曲から、Himawari モトリカーナ といったポップな作品まで、幅広い作風で邦楽の魅力を伝えていた。衣裳も和装をアレンジしたユニークなもので、曲間には軽妙なトークがはさまれる。照明も効果的に用いられ、「長須ワールド」をみごとに作り上げていた。終演後はサイン会も実施し、この茨城が生んだニュー・スターにひと目会おうとたくさんのお客様が並ばれた。《矢澤》アンケートから Rin'のコンサートとは違った、尺八、琵琶がじっくり味わえたコンサートで

した。平家物語の解説もあり、とてもトークもわかりやすく、よかったです(水戸市:F.K.さん) 衣裳のフン困気も平安調を思わせてgood。残念だったのは中井さんが一曲のみだったこと。若い人らしいコンサートだったと思います(無記名の方) すごいしか言えないです手がふるえて書けません(東京都:Y.M.さん) 二十五絃、ピアノとの尺八、びわのセッション良かったです。みち、ひまわりetc 自分の心の中で想像がふくらんでじんとききました(土浦市:Y.O.さん)

ピーター・ウイスベルウェイ

チェロ・リサイタル(3月19日)

【梅祭り・室内楽の宴】の第一弾としてピーター・ウイスベルウェイ(チェロ)とデヤン・ラツィック(ピアノ)が登場した。ウイスベルウェイが最近入手した楽器、イタリアの名工グアダニーニの1760年製のチェロの美しい音色は、バッハ 無伴奏チェロ組曲第2番 でまず存分に示された。ラツィックとの共演となったベートーヴェン ソナタ第3番 とブラームス ソナタ第1番 では、デュオ・ソナタならではの丁々発止のやり取りと親密な対話で聴衆を聴き入らせた。ラツィックの主張の激しい個性的なピアノには賛否両論あったようだが、「数年前までは遠慮しながら弾いていたが、ここ最近で自分の音楽を主張するようになり、それがウイスベルウェイにも大いに認められている」とのこと。デュオとしての今後の2人の発展が楽しみである。アンコールは、フォーレ 夢のあとに、プロコフィエフ チェロ・ソナタ 第2楽章。《関根》アンケートから バッハからブラームスまでバロック、古典、ロマン派と、とても聴きごたえのあるプログラムだった。それぞれの作曲家、時代の音楽がとてもすばらしく表現されており、特にベートーヴェンは伴奏者というよりピアニストとチェリストの競演という感じてとてもよかった。(つくば市:K.W.さん) 超熱演のベートーヴェン、もう感激、感動の素晴らしい演奏に酔いました。驚沢な一夜に感謝します。(鹿島郡:T.Y.さん) ピアノとチェロがそれぞれを主張しながら、お互いを高め合っていく演奏がとてもよかった。(結城市:Y.I.さん) ピアノ伴奏が大きすぎたと思う。ふたを閉じた方がよいと思う。(無記名の方)

プロコフィエフの世界~ピアノと

ヴァイオリンによるコンサート(3月20日)

水戸市出身で現在ドイツを中心に活躍中のピアニスト、永木早知さん。水戸芸術館には2000年にベヒシュタインのピアノを使用したりサイタルを行って以来の再登場でした。今回は、「プロコフィエフの世界」と題し、オール・プロコフィエフ・プログラム

最近の公演から MARCH



1



2



3

1. プロコフィエフの世界
2～3. ATMアンサンブル

のコンサート。前半はソロ、後半は同級生であるヴァイオリンの山本薫さんとのデュオ、と意欲的なプログラムを鮮やかに聴かせてくれました。本当に楽しそうに演奏していたお2人。「楽しかった!」と言って帰っていった永木さんの笑顔は、今回プロコフィエフという作曲家を選んだ思いと、その充実感に満ちていたように思いました。アンコールは、5つのメロディより 第5曲とハイフェッツ編曲 3つのオレンジへの恋 より マーチ。《馬場》アンケートから 安定した力強い奏法が曲想に合っていたと思う(東海村:K.S.さん) トッカータ 作品11が私にはとても新鮮に感じられました。軽快なリズム感が心地よく、最後の低音から高音へ移る音が今までに聴いた事のない響きで、とてもステキでした。(無記名の方) 地元出身で大きく成長された演奏家の里帰りコンサートを水戸芸術館という優れた環境で聴けるのは、非常にぜいたくなことだと思います。(無記名の方)

ATMアンサンブル第20回演奏会
(3月26日)&第11回碧南演奏会(3月27日)

ATMアンサンブル、記念すべき20回目の演奏会はハイドン ひばり、シューマン:ピアノ五重奏曲、そしてブラームスの弦楽六重奏曲第2番と名曲ぞろいのプログラム。小林美恵が第1ヴァイオリンを務めた ひばり は、第1ヴァイオリンがソロイステイックに活躍するこの曲のキャラクターが流麗に示される。田部京子を迎えてのシューマンは、清冽

なピアノと情熱的な弦との絶妙な対話。そして加藤知子が第1ヴァイオリンを務めたブラームスの弦楽六重奏は、交響曲のようなスケール感で雄大に迫る。ゲスト・ヴィオリスト佐々木 亮の控えめながら確かな存在感も光る。ATM15年の歴史を感じさせる成熟したアンサンブル、お楽しみいただけましたでしょうか。アンコールには、ATMアンサンブルと3回共演した園田高弘氏の思い出に、2000年の第15回演奏会のアンコールで演奏されたショーソンの ピアノ、ヴァイオリン、弦楽四重奏のためのコンセルト がしっかりと奏でられた。水戸での演奏会の翌日には、愛知県碧南市芸術文化ホールでの11回目の演奏会。こちらホールのお客様からの熱心なサポートに支えられ、回数を重ねてきた。水戸に負けない、熱烈な拍手が出演者たちに送られた。《矢澤》アンケートから 超一流のメンバー、素晴らしい楽曲、最高のお口直し(アンコール)(東京都:H.S.さん) フルコースのディナー、たいへんご馳走さます。余すことなく、満きついたしました(無記名の方) 目、耳で聴き、そして身体で感じる至福なひとときであった(水戸市:H.W.さん) (前略)ATMアンサンブルは今回が初めてです(中略)しかし、聴いてビックリ!とても素晴らしい音色。19回これを聴きのがしてきたと思うと、悔しくてなりません(東海村:S.M.さん) アンコールのショーソンには涙が止まりませんでした(西東京市:K.H.さん)



* nettama= ネットワークする猫、タマ。芸術館のコンサートをサカナにいるんなところへ nettama します。

『マイ・ウェイ・オブ・ライフ』

一柳 慧さんの 汽水域 が12年半ぶりにMCOで再演される。とても楽しみだ。初演で命を吹き込まれた作品は、再演でどのように姿を変えるのだろう。おそらく、それは 汽水域 であって 汽水域 でない。もちろん演奏も変わる。さらに、作品をとりまく世界が変わることによって 汽水域 は新しい意味を帯びるだろう。

4月13日、東京文化会館で上演された『武満 徹: マイ・ウェイ・オブ・ライフ』に行った。これはご存知かも知れないけれど、武満 徹が生前抱いていたオペラの夢を、彼の「遺志」を次ぐ形で実現したものだ。指揮者のケント・ナガノはリヨン歌劇場のシェフ時代に武満 徹にオペラを委嘱し、ストーリー案まではできたものの、1996年の死によって音楽は書かれずに終わった。諦めきれないケント・ナガノは遺族の了承をとりつは、演出家のペーター・ムスバッハとの共同作業を通じ、武満の既存作品を組み合わせ再構成することによって「幻のオペラ」をベルリンの、そし

てパリの舞台上に立ち上がらせた。それが日本でもこの度上演されたというわけだ。

物語は、武満が構想した原案と異なり死に瀕し妄執に苦しむ老女が自らの人生の3つの時代(60代、30代、幼女時代)を回想しながら、最終的には生の意味を見出し救済されていくというもの。金色の醜怪なメイクを施され力を失い椅子に座る老女の周りを、それぞれの時代の「彼女」が跳梁して行く。スクリーンが舞台を何度も遮断し、武満の電子音楽がスピーカーから不穏に鳴り、ナガノ指揮するベルリン・ドイツ交響楽団の弦楽のためのレクイエム ノヴェンバー・ステップス 等と交錯する。

はじめ僕はどちらかといえば疑念を抱いていた。武満は、このように自作がコラージュされることを望んでいたろうか?表現主義的な身振りや叫びは、彼の音楽の世界と遠いものではないだろうか?

だがある瞬間から、これは「未完のオペラの復元」なのではない、ケント・ナガノとムスバッハ

による解釈、リミックスであり、もっと言うならば武満 徹へのオマージュなのだ。と気づいた(考えてみればあたりまえのことなのだが、それまでの僕の心には「復元」の幻影が巣食っていたのだ)。その地点から、すべての疑念が氷解し、ムスバッハの舞台がずっと心に入って来た。系図が奏でられ、可愛いらしさと不穏さが同居した着ぐるみの幼女が延々と舞台を歩き回る中盤から、僕の心は解き放たれ、死に行く老女と共に生の意味を見つける旅に出た。そして、マイ・ウェイ・オブ・ライフ が歌われ、奏でられる最後のクライマックスで「夢のオペラ」が雲のかなたから曙光のようにその姿を垣間見せたように思えた。

作曲者は作品を生み出す。しかし生まれた瞬間から作品は歩き出し、演奏者によって、演出家によって、新しい力を、そして作品自らも気づかなかった意味を見い出されてゆく。この『マイ・ウェイ・オブ・ライフ』の舞台で武満作品はたしかに新しい生を生きていた。こんどのMCO定期演奏会、一柳作品がまとう新しい生の輝きに注目しよう。そしてそれを聴く僕らもまた、12年前と同じではない。

information

チケットに関するお問い合わせ

...水戸芸術館チケット予約センター / 029-231-8000
営業時間 / 9:30 - 18:00 (月曜休館)

公演内容や企画に関するお問い合わせ

...水戸芸術館音楽部門 / 029-227-8118

【ATM便り】毎月1回茨城新聞に不定期登場。

NHK-FM水戸「芸術よもやま話」第3金曜日 18:15頃 - 15分ほど。水戸周辺 83.2MHz、日立周辺 84.2MHz。

茨城県の演奏家による企画を募集します。.....
平成18年度の茨城の演奏家による演奏会企画を下記の要領で募集いたします。

応募要項請求方法 / 水戸芸術館エントランスホール・チケットカウンター (9:30-18:00 月曜休館)にて直接入手 80円切手を貼付し返信先を記入した封筒を同封の上、下記宛て郵送 下記宛てFAXで請求

応募対象 / 個人:茨城県内の住民票をお持ちの方 団体:茨城県を中心に活動されている団体 ただし、平成17年度の「茨城の演奏家による演奏会企画」にご出演された方は応募できません。

受付期間 / 2005年6月1日[水] - 6月15日[水] (当日必着)

結果の発表 / 2005年10月頃

開催時期 / 平成18年度(2006年4月 - 2007年3月)

提出資料 / 所定の申し込み用紙 これまでの演奏歴を示す資料(演奏会チラシ等) 住民票の写し 2005年1月1日以降の演奏のデモ・テープ(またはCD、MD、DAT)

お問い合わせ / 〒310-0063 茨城県水戸市五軒町 1-6-8 水戸芸術館 音楽部門「演奏会企画」係 TEL 029-227-8118 FAX 029-227-8130 (担当:矢澤)

「水戸の街に響け! 300人の《第九》」コーラス参加者募集.....
水戸芸術館では昨年に引き続き、「水戸の街に響け! 300人の《第九》」を開催するにあたり、一般公募によるコーラス参加者を募集いたします(未経験も可)。詳しくは、応募要項をご覧ください。

公演日時 / 2005年12月18日(日)12:00開演・13:30開演(2回の公演)

応募受付期間 / 2005年7月15日(金) - 7月31日(日) 当日必着

応募要項請求方法 / 水戸芸術館エントランスホール・チケットカウンター (9:30-18:00 月曜休館)にて直接入手 80円切手を貼付し返信先を記入した封筒を同封の上、下記宛て郵送

お問い合わせ / 水戸芸術館音楽部門《第九》係 (担当:関根・馬場・中崎)

〒310-0063 茨城県水戸市五軒町 1-6-8

TEL 029-227-8118 / FAX 029-227-8130

チケット・インフォメーション 5月14日(土)発売分.....

横田鈴琥 尺八リサイタル 8/27(土)15:00開演
料金(全席自由):一般¥3,000 学生(大学生以下)¥1,500

ミト・デラルコ 第8回演奏会 9/11(日)14:00開演

料金(全席指定):A席¥3,000 B席¥2,000

ソング・シアター ワイルからガーシュインへ 9/24(土)18:30開演

料金(全席指定):A席¥3,500 B席¥2,500 *会場:ACM劇場

ミト・デラルコ第8回演奏会には、5月11日(水)より友の会の先行電話予約があります。

これからの演奏会・残席情報.....

○...残席あり(20席以上) ...残席わずか(20席未満) x...残席なし 中央...中央ブロック 左右...裏...左右ブロックおよびステージ裏 補助...補助席

音楽物語 ぞうのパバール 5/3(火・祝) ...自由席

川又明日香 ヴァイオリン・リサイタル 5/22(日) ...自由席

ミハイル・ブレトニョフ ピアノ・リサイタル

6/5(日) ...中央x、左右・裏

4/14(木)現在の状況です。

公演当日に残券がある場合、開演1時間前より水戸芸術館チケットカウンターでお得な学生券を発売いたします。ご購入の際には学生証(記名章)をお持ちください。公開セミナーなど、学生券のない公演もございますので、予めお問い合わせ下さい。

固定席が売り切れ次第、補助席を販売いたします。

水戸芸術館の主な5・6月のスケジュール

コンサートホールATM

音楽物語 ぞうのパバール 5/3(火・祝)14:00開演
料金(全席自由):大人¥1,500 小人(3歳以上12歳以下)¥1,000
水戸芸術館友の会 第39回鑑賞会 アンサンブル・ウィーン 5/21(土)18:30開演
料金(全席指定):[一般]A席¥3,500 B席¥2,500 学生(大学生以下)¥1,000
[友の会会員]A席¥2,500 B席¥1,500
川又明日香 ヴァイオリン・リサイタル 5/22(日)15:00開演
料金(全席自由):一般¥2,500 学生(大学生以下)¥1,800
「茨城の名手・名歌手たち 第16回」出演者オーディション 5/28(土)
入場無料 詳細はお問い合わせ下さい。
ミハイル・ブレトニョフ ピアノ・リサイタル 6/5(日)14:00開演
料金(全席指定):A席¥5,000 B席¥4,000
水戸室内管弦楽団第61回定期演奏会 6/18(土)18:30開演、6/19(日)14:00開演
料金(全席指定):S席¥5,000 A席¥4,000 B席¥3,000

エントランスホール

パイプオルガン ブロムナード・コンサート
5/1(日)12:00/13:30 5/15(日)12:00/13:30 5/29(日)12:00/13:30
6月:未定
ゴールデンウィーク・スペシャル 親子で楽しむオルガン・コンサート
5/4(水・祝)12:00/13:30 5/5(木・祝)12:00/13:30
出演:柳澤文子
入場無料 演奏は各回20分程度です。

ACM劇場

『いとこ同志』 5/7(土)19:00開演、5/8(日)14:00開演
料金(全席指定):A席¥5,000 B席¥3,000
劇団唐組《新作》水戸公演『鉛の兵隊』
会場:水戸芸術館広場特設紅テント(雨天決行)
5/20(金)19:00開演、5/21(土)19:00開演、5/22(日)19:00開演
料金(全席自由):一般¥3,000 団体(10名以上)¥2,700 学生¥1,500
シリーズ・日本の劇作家たち3 飯沢匠『北京の幽霊』
6/3(金)19:00開演、6/4(土)19:00開演、6/5(日)14:00開演
6/10(金)19:00開演、6/11(土)19:00開演、6/12(日)14:00開演
料金(全席自由):一般¥2,500 学生¥1,500

現代美術センター

「造形集団 海洋堂の軌跡」
4/9(土)~6/5(日)9:30~18:00(入場は17:30まで)
休館日:月曜日 入場料:一般¥800 前売・団体(20名以上)¥600
中学生以下・65歳以上・各種障害者手帳をお持ちの方は無料
水戸市芸術祭 いけばな展
6/17(金)~6/19(日)9:30~18:00(入場は17:30まで)
最終日は9:30~17:00(入場は16:30まで) 入場無料
水戸市芸術祭 美術展覧会 第1期 日本画・洋画・彫刻・工芸美術
6/26(日)~7/8(金)9:30~18:00(入場は17:30まで) 入場無料

茨城の主な5・6月の演奏会 *今号はスペースの都合で水戸市内の演奏会に限らせていただきます。

佐川文庫 TEL / 029(309)5020
池辺晋一郎 = 音楽談義 = 「音楽の不思議」~メロディのからくり~
5/14(土)18:00開演
北村朋幹 ピアノ・リサイタル 6/11(土)18:00開演
常陽藝文センター TEL / 029(231)6611
ヨーク大学合唱団コンサート 5/21(土)14:00開演
(問)水戸キリストの教会 TEL / 029(231)1669
300人 PREMIUM CONCERT ケイコ・リー
5/22(日)17:30開演 (問)EVANS TEL / 029(251)6665(13:00~)
藝文友の会会員優待催事 小原孝 ピアノ・コンサート 6/25(土)18:30開演
茨城県民文化センター TEL / 029(241)1166
ポーランド国立歌劇場「サロメ」 6/16(木)18:30開演
水戸市民会館 TEL / 029(224)7521
茨城オペラ30周年記念ガラコンサート 5/21(土)13:30開演
(問)茨城県民オペラ協会 TEL / 029(247)8013
大正琴チャリティー演奏会~アジアのこどもたちのために パートIII~
6/4(土)13:00開演
ルーマニア国立混声合唱団「マドリガル」 6/9(木)18:30開演
(問)ルーマニア・フェスティバル2005実行委員会茨城支部 TEL / 029(240)3300

水戸芸術館音楽紙[ヴィーヴォ] 2005年4月発行 第107号
編集・発行 / 水戸芸術館音楽部門 〒310-0063 茨城県水戸市五軒町 1-6-8
TEL:029-227-8118 FAX:029-227-8130
e-mail [ankmr@arttowermito.or.jp] URL [http://www.arttowermito.or.jp/]
編集 / 水戸芸術館音楽部門(五十音順):関根哲也 中崎美智代 中村晃 馬場千恵
矢澤孝樹(編集長)
DTP / office west
印刷所 / 株式会社あけぼの印刷社

次号は...ATM15周年、祝祭はまだまだ続く!